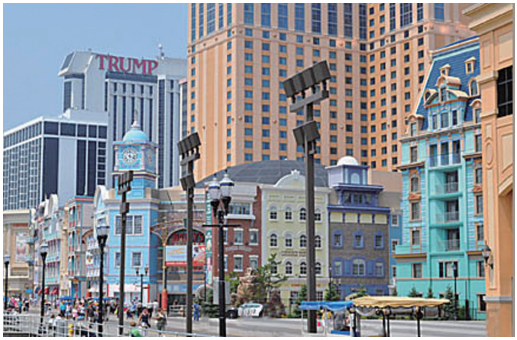
Japaneseman In NY（ニューヨーク生活）



(Photo: Atlantic City)

≪夢のアトランティック・シティ≫

今回はニューヨークに住んでいた頃に時々訪れていたアトランティック・シティの話。

アトランティック・シティはマンハッタンのあるニューヨーク州の隣の州、ニュージャージー州アトランティック郡に位置する観光都市で、1976 年にギャンブルが合法化されて以来、ラスベガスと並ぶカジノで有名な都市でもある。

また、ニュージャージーといえば音楽面では、ブルース・スプリングスティーンやボン・ジョビィの出身地としても有名だが、ニュージャージーのアトランティック・シティに時々訪れていたのは音楽とは全く関係なく、カジノ目当てだった。

ひとりで出向くことはなかったが、奥さんと結婚する前マンハッタンの狭いアパートで一緒に暮らしていた頃の 2 人の密かな楽しみで、3 か月に 1 度くらいの割合で訪れていた。とはいってもウェイターで生活していたため、大金を所持して遊びに行くなんて感覚とは程遠く、日々コツコツと貯めたチップから家賃や食費など必要経費を差し引いて残った 150~200 ドル程を握りしめて、大金ゲットを夢見ながら行くのが常だった。

その夢のアトランティック・シティへは、大陸を横断するグレイハウンド・バスなどの発着場でもある 8th アヴェニューと 42th 丁目の角にあるポート・オーソリティ・ターミナルから直行バスで 2 時間ほどかかったが、毎回出発する時のワクワク感は今も忘れていない。アトランティック・シティにはビーチ沿いにカジノが入ったホテルが立ち並んでいて、ボード・ウォーク沿いにはたくさんの店や遊園地もあった。週末になるとたくさんの家族連れの姿も目立つなどアメリカの魅力を感じる場所でもあった。バスに乗る前に遠足気分で食べ物や飲み物を買い、アトランティック・シティへと向かう車外の景色にワクワクされつつ、もしかしたら夢の大金が…勝ったら帰りに美味しいものでも食べて帰ろう…なんて毎回いろいろと想像をめぐらせながらの小旅行となった。

アトランティック・シティに到着するとバスから眺めた魅力的な景色はすっかり忘れ、カジノに直行。特に決まったカジノに入るわけではなかったが、その時々で適当に足を踏み入れた。どのホテルのカジノも店内はアメリカ映画に出てくるようなにぎやかな光景が広がり、電飾も派手派手しく、ずらりと何十台も並んだスロットなどから流れる機械音や音楽が派手に聞えてきて、自然と心もワクワクし、毎回訪れる度に胸騒ぎを感じていた。

毎回到着すると 2 人でまずは試しにと 20 ドル程賭けるのだが、カジノと言ってもやるのはほぼルーレットのみ。ポーカーやブラック・ジャック等は細かなルールがよく分からないし、変なことを仕出かしてディーラーや他の客に迷惑をかけてしまう不安もあったのでその種のカジノには一度も手を出さなかった。その点ルーレットはシンプルだし、まずはディーラーにドル紙幣とチップと呼ばれるプレイヤー毎に色分けされたルーレット専用のプラスティック製のコインのようなものに代えてもらうのだが、そのチップの手触りも心地良く、そのチップを番号が記されたテーブルに並べて、ディーラーの「No more bets!」という声と共にルーレットが回される。一瞬でコインが吸い込まれていくスロット・マシーンなどとは違い、ある程度時間をかけて遊べる点も魅力だった。チップの置き方・賭け方はいろいろあるのだが、何と言っても自分の意思で番号を選べる所も好きだった。

外国人のディーラーや外国人だらけの客に交じって 2 人の若い東洋系のカップルが紛れているのは客観的に見るとやや異質な光景だったかもしれないが、こんな時もアメリカに居ることを実感できる瞬間だった。また、何となくカジノのルーレットのテーブルを囲んでいる時ばかりはちょっとだけ一流になった気分だった…。200 ドル持っていたとしても、1 ドルのチップ 200 枚に交換したとして、1 回に 10 枚程のチップを番号に置いてもし一度も当たらないと 20 回で終わる。20 回だと 1 時間程で終わってしまうので、最初に 20 ドルほど試しに賭けて全く当たらない時はちょっと焦ったりもした。そんな時はカジノの場所を移動したり、ディーラーの佇まいやテーブルを囲む客層などを見ながら様子を伺った。

何回かやっていると気付くのだが、癖というか、自分の好みなのだろう…意外に同じ番号ばかりに置いていたり、同じ番号に置きたくなる傾向にある自分に気付くのだが、毎回自分の一番好きな数字「27」にはほぼ欠かさず置いていた。嘗て地元大洋ホエールズのエースで背番号「27」を付けていた平松政次投手のファンだったことから「27」が好きになったのだが、何度かその「27」に 3 枚ほどチップを重ねて置いて大当たりを経験した。正にラッキー・ナンバー！　一挙にチップを勝ち取ったこともあったが、その時の興奮が忘れられなく、そうそう当たることなんかないのに「27」には必ず置いていた…。

ほとんどの場合、お昼頃に夢のアトランティック・シティに到着したものの、太陽が西に傾く前に 2 人の賭け金が底を尽き、行きのウキウキした気分はどこへやら…2 人してうな垂れながらマンハッタンへと戻るバスの中で揺られていたものだが、過去に一度だけ 100 ドル程の賭け金から最終的に 700 ドル程勝ち、その時は 2 人で合計 1000 ドル程勝ったことがあった。

幸いカジノで身を滅ぼすほどのめり込むことはなかったが、アトランティック・シティは夢のような場所であり、ニューヨーク生活の楽しみの一つだった。ちなみに、本誌『The Walker’s』の twitter アカウントが「TheWalkers27」と「27」が付けられているのもラッキー・ナンバーの名残です…。